様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０４５３６

研究課題名（和文）19世紀英国における建築・装飾美術思潮と日本の建築界への影響と展開

研究課題名（英文）19th century movement of architecture and decorative art in England and their influence on the Japanese architecture

研究代表者
足立　裕司（Adachi, Hiroshi）

神戸大学・工学研究科・名誉教授

研究者番号：６０１１６１８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は19世紀イギリスに興ったアーツ＆クラフツ運動に至る建築・工芸運動の日本への影響関係を考察した。従来の研究では西欧と日本の建築工芸における形態上の比較が優先し、その背景となる思想に関する影響についてはモダニズムの形成期まで等閑視されてきた。
本研究では英国で興ったゴシック・リヴァイヴァル運動からその展開としてのアーツ＆クラフツ運動が1900年前後の建築思潮に及ぼした影響について再検討を行い、アーツ＆クラフツ運動の中心課題であった装飾芸術ついての基礎理論や建築作品に到達するための制作理念が武田五一という建築家を通じてどのように理解され、建築工芸界に伝わっていったかということを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで日本の建築界では、モダニズムの成立過程としてアール・ヌーヴォーからウィーン分離派、ドイツ表現派へと至る活動を中心に言及されてきたが、それらの潮流の基となったイギリスのゴシック・リヴァイヴァルからアーツ・アンド・クラフツ運動へと至る活動の日本への影響については看過されてきた。
本研究では、武田五一という一人の建築家を通じて、これまで看過されてきたイギリスの19世紀末の動向の影響について考察を行った。彼の残した膨大な旧蔵品の資料を含めて、当時の世界の建築界の思潮を再考し、外形的な関係性に重きを置きをおいた研究から、制作における理念的な側面について明らかにすることができたと考える。

研究成果の概要（英文）：This study examined the influence of Art and Crafts movement on Japanese architecture, which arose in England in the 19th century . Previous researches have prioritized formal comparisons between Western European and Japanese architectural works, and neglected the influence of the underlying ideas until the formative period of modernism.
In this study, we will reexamine the influence that the Gothic Revival movement and the Arts and Crafts movement that arose in England, had on architectural thought around 1900 in Japan. It reveals how the basic theories of architecture and the design philosophy for realizing architectural works were understood through the architect Goichi Takeda, and how they were transmitted to the architectural and craft world.

研究分野：近代建築史・建築論、保存修復

キーワード：ゴシック・リヴァイヴァル　アーツ・アンド・クラフツ運動　武田五一　制作論　日本近代建築思想史　近代住宅史　装飾芸術　古建築保存

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

19 世紀英国における建築・装飾美術思潮と日本の建築界への影響と展開

１．研究開始当初の背景

筆者が本研究に関連する研究活動を始めた時にはモダニズムの成立過程に関心を持っていたため、アーツ・アンド・クラフツ運動からアール・ヌーヴォー、ウィーン分離派などへの動向と関連する武田五一の作品表現に焦点を合わせた研究内容となっていたと思われる。そのために、外形的な関係性に重きを置くという傾向があり、武田五一の制作についての内的な志向に迫るには不十分な内容となっていたと思われる。

それでも、本研究に先立つ研究にも多くの収穫があり、日本におけるアール・ヌーヴォーの影響を考察している間に、旧鴻池組本店・旧宅という現存する稀少な事例について調査することができ、日本におけるアール・ヌーヴォー移入の一端を明らかにすることができた。その結果、住友臨時建築部と鴻池組との関係から、野口孫一や日高胖、木子幸三郎といった建築家の活動へと研究範囲を広めることができ、彼らが所属した住友臨時建築部の活動において西欧の新しい動向を取り入れようとしていたことや、その正反対ともいえる日本の古民家への関心の芽生えといった新たな動向にも焦点を当てることができた。特に後者への関心はアーツ・アンド・クラフツ運動の原点ともいえる、自国の伝統への関心と共通することを指摘してきた。

また、阪神大震災という、これもまた得難い体験のなかで、建物から歴史的環境の保存を考える機会が増し、W. モリスの古建築保存の活動に触れることになった。武田五一が担った古社寺の保存や修復という別個の活動として捉えてきた活動もまた、彼が最初の渡航時に邂逅する機会を得たアーツ・アンド・クラフツ運動に含まれる活動であることから、この歴史的環境に関する領域においても武田五一の活動に通底するものとして、イギリスの影響があったことを再考することができた。

上記のような関心とともに、本研究以前から武田五一の残した膨大な量の旧蔵品の整理を行ってきたが、漠然と措定していたアーツ・アンド・クラフツ運動の影響を示す証左を旧蔵品から発見することもあり、再考の軸を日本の建築界ではなぜかあまりを振り返ることがなかったアーツ・アンド・クラフツ運動を中心に武田五一の思考を辿ることができるという確証を得ることができたことは大きな収穫であったと思われる。

２．研究の目的

これまで日本の建築界では、モダニズムの成立過程としてアール・ヌーヴォーからウィーン分離派、ドイツ表現派へと至る活動を中心に言及されてきたが、それらの潮流の基となったイギリスのゴシック・リヴァイヴァルからアーツ・アンド・クラフツ運動へと至る動向の日本への影響については看過されてきた。

また、従来の研究では西欧と日本の建築思潮の比較は形態上の比較が優先し、その背景となる思想についての影響関係については等閑視されてきたと考えられる。日本の近代建築史では、明治維新に先駆けて英国で興ったゴシック・リヴァイヴァル運動及び、その動向を継承して興ったアーツ・ アンド・クラフツ運動が掲げていた理念について言及されることは、ほとんどなかった。本研究では，筆者の従前の研究を継承、発展させながら、不足していた同時期のイギリス以外のフランス、ドイツ、アメリカ等の建築思潮からの影響も考察に加えつつ、日本の建築界での動向との異同を検証しながら、明治後期以降の建築界の思潮を形成するに至った過程についてより深く検証することを目的としている。

上述の研究当初の段階では、筆者は武田五一という一人の建築家に注目して研究を続けてきたが、これまでの一連の研究を通じて、武田五一研究であると同時に日本の建築界を彼の視点を通して捉えうること、当時の建築界の実情をより深く捉えることができるという展望を得ることができたと思われる。

本研究は、そうした研究を承けて、特に武田五一が影響を受けたと考えられる 19 世紀英国における建築・装飾美術思潮について、彼の視点ではどのように捉えることができたのか、という観点から問い直した。言い換えれば当時の日本人建築家の西洋建築思潮に対する理解と解釈の様相を解明することを目的とし、これまで看過されてきたイギリスの 19 世紀末の動向の日本への影響について考察することを目的とした。

３．研究の方法

本研究では筆者の従前の考察を補完する形で研究を進め、発表を終えた過去の論考については、形式面での考察を補完するために創作の背景となる制作理念や設計の方法論の解明に努めた。

具体的には、研究１：東京帝国大学の初期卒業生の思想の解明、研究２：日本の近代建築の思考と概念の特徴、研究 3: 様式論争で用いられた論理と概念の分析、研究４：後世の建築論との比較検討、という 4 つのテーマからイギリスのアーツ＆クラフツ運動の日本への影響を検討した。

本研究では、当時の日本の建築界の動向の背景となる理念としてアーツ・アンド・クラフツ運動の影響を措定し、その影響についての検証を行っている。検討に際して、武田五一という建築家の視点から、どのように海外の動向が解釈されていたかを比較を行うことで、当時の日本の建築界の建築思潮についてのより具体的で客観的な評価を比較検討することとした。

武田五一の活動領域には、住宅論、設計法・制作理論、建築・図案教育活動、装飾芸術・工芸振興の指導、古建築保存、F. L. ライトやヨーロッパの建築界の動向の紹介と評価、大蔵省臨時建築部の構成員として帝室議事堂をはじめとする技術官僚としての活動など数々の活動があるが、結果として、それらの活動の背景全体にアーツ・アンド・クラフツ運動が目標としていた理念の反映を見て取ることができ、これまで見過ごされてきた同運動の日本における受容を確認するには最適であると考えた。

４．研究成果

武田五一の装飾芸術に関する視点はモダニズムの興隆の中でも保持され続けている。古建築の装飾については多く論考を残しているが、新たな時代の制作に求められる装飾についての言説については、かなり後年になされたものではあるが、彼の著書『建築装飾及意匠の理論並沿革』から西欧の装飾論との影響関係を考察した。

彼は装飾とは「装飾する」という行為であり、またその結果としての作品を指し、建築外の職能においても広く用いられていると規定する。室内装飾という分野は室内デザイン全般、つまり家具から壁紙、絨毯、照明など建築の領域を越えて工芸から工業製品という広い領域を包摂していることになる。武田の装飾論における領域は、その職能からみても創作活動全般を担う役割を措定していたと考えられる。

彼が教育を行っていた「図案」とは、そういったデザイン行為全般に関連する基礎教育ではあるが、建築という分野を出自としてもつ武田にとっての装飾とは、そうした拡張された領域を含みながらも中心には建築装飾を置いていたと考えられる。J. ラスキンの言葉を待つまでもなく装飾とは、少なくとも 19 世紀の建築家にとっては美を体現する最重要の行為の一つであり、そのために求められる素養でもあったのである。

しかし、武田が生きた 19 世紀から 20 世紀にかけての建築界は装飾自体を否定していく時代であり、彼もそれに抗うほど無自覚ではなく、むしろ無装飾の建築という動向を理解しつつも、装飾のもつ役割を引き受けていたと考えられる。上記の彼の装飾論では、建築における装飾論に限定しながらも、一般論として工芸や衣食住のデザイン行為までを範囲として含めて展開していることから、彼の「装飾」に対する幅広い見識、すなわちイギリスで形成されてきた「身の回りの環境」全体の改良を目的とすることを装飾の役割とみなしていることが窺える。彼の装飾に対する包摂的な見解にこそアーツ・アンド・クラフツ運動を実際に見聞きし、理解してきた彼の建築観が現れていると思われる。

ただし、彼の『装飾論』は全体を通して共著者である元良勲の考えが強く現れていると思われる。装飾を機能や構造、実用性と強引に結びつけようとする論旨は、それまでの武田の論調とはいかにも異なっているからである。しかし、巻頭の色彩の取り合わせや実際のデザイン例などの図版は武田の実績からしか提示できないものであり、内容としても日本建築や比例論、色彩論などは彼の研究の成果を反映したものであることも事実である。

おそらく、論理を駆使した内容の多くは元良の説であるとしても、注意深く読み進むなら事例や短い文章の端々に彼らしい関与の跡を見いだすことができると思われる。

まず装飾の規定であるが、多くの主張は A. D.F. Hamlin “A History of Ornament Ancient and Medieval”からの援用である。ただ、武田がこの書の冒頭で述べている意匠（構想段階）と計画（実施段階）がこの装飾論でも分けられ、実施段階として建築材料というこれまで触れられなかった領域が含まれていることは注目される。

『装飾論』は Hamlin の内容に沿いながら、その文中にはない日本や近年の事例を取り上げている。終章は先行する内容と比べて不釣り合いなほど短いが、そこに武田の考えと思われる内容を読み取ることができる。最終章の第五章「建築と装飾」の構成は「総説」と「構造と装飾」、「意匠と装飾」及び「用途と装飾」（半ﾍﾟｰｼﾞ）からなる。論旨としては、「建築の機能」は構造、意匠、用途であることから、それぞれの「機能」別に装飾との関係を論じている。構造との関係では力を受け持つ構造材と非構造材を区別し、それぞれに相応しい装飾の形状を示し、用途との関係では意匠効果を高める Enrichment の効用を強調し、用途との関係では装飾のもつ象徴性に触れている。これらの指摘は、対象は違うが彼の「平等院の装飾に就いて」で触れた内容に対応しているといえる。鳳凰堂の装飾だけでなく色彩や比例についても併せて述べているので、先行する装飾論として検証した。

なお、本研究以前の論考において残されていた重要な論点として、昭和戦前期には日本の伝統的な住宅建築とモダニズム建築との共通性や影響関係が注目されるようになる。武田五一の足跡を辿ると茶室や民家といった対象が日本の建築界でどのように再発見され、評価されていくかという内的な変化の一端が窺えるように思われる。武田五一の残した旧蔵品には民家に関する関心の深さが意外にも早い時期から現れている。彼の最初の研究テーマであった茶室への関心が民家との関係としてどのように捉えられていたかは分明ではないが、徳富蘇峰ら当時の思想界で単なる日本家屋を「日本的なるもの」の表れとして評価しようとしたことからも、武田の

早い時期からの関心事として見過ごしてはならないと思われる。
　さらに大正期になると、アムステルダム派への関心から、日本の民家への注視が引き起こされ、さらに昭和期になると日本の住宅建築がモダニズムのパイオニア達から注目されるようになる。インターナショナル建築会、岸田日出十刀、前川國男、今和次郎など、関心の所在は異なるにせよ、民家という対象が堂々と建築学のなかで位置を占めるようになるのである。
　建築という領域に地域性や素朴な民衆の活動から生みだされた民家という対象が、どのような評価と感性のなかで認知されていくのかという関心は、実は私自身が研究を始めた当初から抱いていた課題であり、建築学の中でも問い直されなくてはならない重要な課題の一つではないかと思われる。
　以下、本研究の年度ごとの成果を列挙する。

2018 年度
　当該年度の研究成果としては、日本におけるゴシック・リヴァイヴァル運動およびアーツ・アンド・クラフツ運動の影響として、当時に建築思潮において、大きな影響力を持っていた伊東忠太の卒業論文への影響について精査し、伊東が参考としたヴィオレ・ル・デュクと J.ラスキン、および W.チェンバースなどの思想との関連性を検討し、さらにその影響として武田五一の建築観との相関について明らかにすることができたと思われる。
　この他、武田五一が古典主義から離脱してゴシック・リヴァイヴァル運動およびアーツ・アンド・クラフツ運動という新しい傾向に向かうことによって生じることとなった設計法上の課題を解決するための比例法の具体的な使用事例について検討し、和風建築においても同様の比例関係を重視した設計法が用いられていることを解明した。
　また。武田五一の功績の一つとされる F.L.ライトの日本への紹介に関して、両者の建築観における共通の基盤にとして、イギリスのゴシック・リヴァイヴァルおよびアーツ・アンド・クラフツ運動の影響があることを解明することができたため、今後両者の関係性についてより深化させることができると思われる。

2019 年度
　前年度は日本におけるゴシック・リヴァイヴァル運動及びアーツ・アンド・クラフツ運動の影響として、当時の建築思潮において大きな影響力を持っていた明治の第二世代の建築家である伊東忠太からの影響を精査してきたが、本年はそれに先行する辰野金吾等の第一世代の建築家との比較を通じ、さらにその後の展開としての分離派建築会に代表される第三世代の建築観との比較を行った。その結果として、第一世代から保持されてきた「造家」「様式」「建築術・工法」といった実践的な視点から必要となる用語の使用が、第二世代の建築家達はヴィオレ・ル・デュクや J.ラスキンなどの思想を参照することによって正確な建築概念を定位し、「美・用・強」や「様式の生成」、「科学と美術」「国民性と伝統」といった高次の視点へと展開していくことが明らかとなった。
　一方、第三世代になると、第二世代まで継承されてきた建築の核心である「実用性」が放棄され、「個の表現」が希求されるようになると、建築の存在理由である「実用性」に代わり新たに自律的な「機能」という概念が移入され、それまでの「科学性」に代わり「素材・構造」といった概念が重用されることなることが明らかとなった。
　その他、装飾概念の推移についての検討や武田五一の文化財保存と修復活動における言説から上記 19 世紀イギリスの美術工芸・建築運動の影響があることが解明されたことは大きな収穫であった。

2020 年度
　昨年来からの新型コロナの蔓延により渡航が不可能となっているため、国内資料と国内で入手できる海外のデジタル資料および文献等によって研究を行った。その結果として、本研究の 1 番目のテーマである「東京帝国大学の初期卒業生の思想の解明」から 3 番目のテーマである「後世の建築論との比較検討」までに関して研究は順調に進捗しており、日本の近代建築史上における第二世代の前後世代との関係性と異同、連続性と不連続性についての知見を得ることができた。具体的には次世代を代表する分離派建築会の研究について第二世代を代表する武田五一についてのこれまでの研究を比較することにより、これまで看過していた世代間の制作姿勢の相違が明らかとなった。同様に、前世代との比較においては、第二世代との間に通底するイギリスのゴシック・リヴァイヴァル運動との理念上の連続性が確認された。

2021 年度
　昨年までの研究により明らかとなった世代間の制作姿勢の相違に加え、第 1 テーマ「東京帝国大学の初期卒業生の思想の解明」から第 3 テーマ「後世の建築論との比較検討」までの考察から抜

けていた制作論の視点からの検討を加えた。特に日本の近代建築界の過渡的な世代に当たる第二世代の制作理論として武田五一の言説を精査し、同時にイギリスの建築理論家の先駆けとなったW.ChembersやJ. Gwilt、J. Ruskinらの理論との照合を子細に検討することにより、当時の日本の建築家にみられる様式に基づく制作方法の推移と様式の選択と応用を可能とする基礎的な形式理論への影響関係を明らかにすることができた。

また、当時の建築家たちが常識的に捉えていた建築と装飾についても検討を行い、アーツ・アンド・クラフツ運動の理論との比較を通してそれぞれの関係性を明らかにすることができたと考える。以上のような考察から、当初の研究テーマから看過していた日本の建築界に対する海外の制作理論の影響とその受容について光を当てることができ、研究を総合する基礎的な知見を得ることができたと考える。

2022年度

近代日本の建築家の設計法について、武田五一の制作論を中心に研究を行ってきたが、これまでに彼の形式理論の把握ともう一つの意匠論としての装飾論、さらに形式理論の一端として位置付けられていた色彩論について検討することができ、これまで建築論のなかでは看過されてきた装飾芸術の基礎理論について考察することができたと考える。研究２の「日本の近代建築の思考と概念の特徴」と研究 3 の「様式論争で用いられた論理と概念の分析」および、研究４の「後世の建築論との比較検討」については武田五一以降の建築世代が傾倒したアメリカの F.L.ライトの初期制作論ついて検討することにより、武田五一とライトの制作論において共通する基盤としてイギリスのアーツ＆クラフツ運動の影響が認められることを確認することができた。本研究を全体としてまとめる作業を進めることはできなかったが、個別の課題には対応することができたと考える。

2023年度

本研究は先にも述べたが、研究１：東京帝国大学の初期卒業生の思想の解明、研究２：日本の近代建築の思考と概念の特徴、研究3: 様式論争で用いられた論理と概念の分析、研究４：後世の建築論との比較検討、という 4 つのテーマから上記のアーツ＆クラフツ運動の日本への影響を検討してきたが、本年度はその総括として研究の集約を行った。

その他、新たな研究成果としては、これまで作品上ではアメリカのアーツ＆クラフツ運動の影響下にあるとされてきた F.L.ライトの作品について、旧山邑家住宅の調査を踏まえて、これまで十分ではなかった敷地と建物との関係性を明らかにした。具体的には、すでに取り壊されていたために見過ごされてきた付属建物の確認を行い、ライトの構想が敷地全体を踏まえたものであり、自然との調和を重視した計画であることを解明できたことで、旧山邑家住宅がライトの理念を強く反映している作品であることを指摘することができた。

以上の研究を通じ、アーツ＆クラフツ運動の中心課題との比較検討を行い、建築作品に到達するための制作理念がどのような形で日本に理解され、吸収されてきたのかについて知見が得られたと考える

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計24件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　24件）

１．著者名 足立裕司	４．巻 -
２．論文標題 旧山邑家住宅の制作意図について ―当初設計図と敷地発掘調査からの再考察―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本建築学会大会梗概集	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 足立裕司	４．巻 -
２．論文標題 旧山邑家住宅の制作理念に関する研究 ―建設経緯と敷地環境に関する調査を踏まえて―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本建築学会近畿支部研究報告集	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 足立裕司他	４．巻 -
２．論文標題 旧山邑家住宅保存運動を振り返って	５．発行年 2024年
３．雑誌名 YODOKO NEWS	６．最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 足立裕司	４．巻 -
２．論文標題 取り壊しの危機を超えて―旧山邑家住宅の戦後の動向	５．発行年 2024年
３．雑誌名 YODOKO NEWS	６．最初と最後の頁 7-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司他	4．巻 -
2．論文標題 旧山邑家住宅（ヨドコウ迎賓館）での暮らし	5．発行年 2023年
3．雑誌名 YODOKO NEWS	6．最初と最後の頁 5-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 旧山邑家住宅（ヨドコウ迎賓館）の不思議発見	5．発行年 2023年
3．雑誌名 YODOKO NEWS	6．最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 武田五一の制作論における色彩論とその理論的背景―武田五一研究（23）	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本建築学会大会梗概集	6．最初と最後の頁 413-414
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 日本におけるF.L.ライトの理解に関する研究―武田五一研究（22）	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本建築学会近畿支部研究報告集	6．最初と最後の頁 285-288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 武田五一の制作論における装飾とその理論的背景　―武田五一研究（21）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本建築学会大会梗概集	6．最初と最後の頁 669-670
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 武田五一の制作論への西欧の影響とその展開 ―武田五一研究（20）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本建築学会近畿支部研究報告集	6．最初と最後の頁 429-432
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 鴻池組旧本店―受け継がれてきた美と歴史的・建築的価値に魅せられて	5．発行年 2022年
3．雑誌名 株式会社鴻池組コーポレイトサイト	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 武田五一の制作理念に関する考察 ― 武田五一研究（19）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本建築学会大会梗概集	6．最初と最後の頁 759-760
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 武田五一の建築観におけるJ. Gwilt “Encyclopedia of Architecture”の影響―武田五一研究(18)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本建築学会近畿支部研究報告集	6．最初と最後の頁 509-512
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 6
2．論文標題 東北学院旧宣教師館（デフォレスト館）の 建築形式に関する再考察	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東北学院史資料センター年報	6．最初と最後の頁 10-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立　裕司	4．巻 -
2．論文標題 武田五一の日本建築観について 武田五一研究（17）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 767-768
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 西脇小学校校舎を 使い続けていくために	5．発行年 2019年
3．雑誌名 京都橘大学広報誌「つながる」	6．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 ヨドコウ迎賓館（旧山邑家住宅）の保存工事を終えて【後編】	5．発行年 2019年
3．雑誌名 YODOKO NEWS	6．最初と最後の頁 5-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 ヨドコウ迎賓館（旧山邑家住宅）の保存工事を終えて【後編】	5．発行年 2019年
3．雑誌名 YODOKO NEWS	6．最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 武田五一とF．L．ライトとの関連とアーツ・アンド・クラフツ運動の影響について　武田五一研究（16）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 713-714
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 武田五一の寺院建築における理念と設計法について 武田五一研究(15)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本建築学会近畿支部研究報告集	6．最初と最後の頁 525-528
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 西山家住宅の建築について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 「国指定名勝　西山氏庭園」 総合学術調査報告書	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 日本におけるゴシック・リヴァイヴァリズムの影響について ― 武田五一研究（14）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本建築学会大会梗概集	6．最初と最後の頁 981-982
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 -
2．論文標題 武田五一の建築観とアーツ・アンド・クラフツ運動（その7） 武田五一研究（13）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本建築学会近畿支部研究報告集	6．最初と最後の頁 525-528
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 足立裕司	4．巻 133
2．論文標題 歴史的建造物の修復とその目標―近代建築を中心として―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 文建協通信	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　6件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 足立裕司
2．発表標題 旧山邑家住宅の今 ー私とこの邸宅との関わりー
3．学会等名 シンポジウム「建築と音楽」（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 足立裕司
2．発表標題 シンポジウム「西脇小学校の保存・改修工事について」
3．学会等名 日本建築学会近畿支部（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 足立裕司
2．発表標題 SDGｓ時代の建築家の役割
3．学会等名 日本建築家協会兵庫地区大会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 足立裕司、藤森輝信、腰原幹雄
2．発表標題 木造校舎のある風景－地域の歴史的環境を考える
3．学会等名 西脇小学校重要文化財指定記念シンポジウム（招待講演）
4．発表年 2022年

１．発表者名 足立裕司
２．発表標題 武田五一の古建築修理とその理念について 武田五一研究（17）
３．学会等名 日本建築学会大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 足立裕司
２．発表標題 分離派建築会ーモダニズム建築への道程
３．学会等名 シンポジウム「分派派建築会ーモダニズム建築への道程」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 足立裕司
２．発表標題 武田五一の建築観におけるJ. Gwilt “Encyclopedia of Architecture”の影響 武田五一研究(18)
３．学会等名 日本建築学会近畿支部研究発表会
４．発表年 2021年

１．発表者名 足立裕司
２．発表標題 武田五一の制作理念に関する考察 ― 武田五一研究（19）―
３．学会等名 日本建築学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 足立裕司
２．発表標題 武田五一と住宅のモダニズム
３．学会等名 大阪市立住まいセンター講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計7件

１．著者名 足立裕司	４．発行年 2024年
２．出版社 私家版（科学研究費補助金）	５．総ページ数 194
３．書名 武田五一と世紀転換期の建築に関する研究　附 武田五一旧蔵品目録	

１．著者名 足立裕司	４．発行年 2023年
２．出版社 旧山邑家住宅（ヨドコウ迎賓館）付属建物と敷地環境に関する調査報告書	５．総ページ数 65
３．書名 淀川製鋼所	

１．著者名 足立裕司	４．発行年 2023年
２．出版社 書寫山圓教寺摩尼殿調査報告書	５．総ページ数 163
３．書名 書寫山圓教寺	

1．著者名 足立裕司、田路貴浩編、池田祐子 河田智成 水沢勉 長谷川章 南明日香 堀勇良 加藤耕一 角田眞弓 河東義之 天内大樹 内田青蔵 橋爪節也 杉山真魚 田中修二 岡山理香 田所辰之助 梅宮弘光 本橋仁	4．発行年 2020年
2．出版社 京都大学学術出版会	5．総ページ数 576
3．書名 分離派建築会ー日本のモダニズム建築誕生	

1．著者名 足立裕司編著、田中学、高田暁、竹林英樹	4．発行年 2021年
2．出版社 西脇市教育委員会	5．総ページ数 237
3．書名 西脇市立西脇小学校保存改修工事報告書	

1．著者名 田路貴浩、足立裕司他	4．発行年 2020年
2．出版社 京都大学出版会	5．総ページ数 23
3．書名 分離派建築会―日本における建築「創作」の誕生、第2章4を担当	

1．著者名 足立裕司、他（共著）	4．発行年 2019年
2．出版社 文化庁	5．総ページ数 369
3．書名 近代遺跡調査報告書―交通・運輸・通信業―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

シンポジウム[木造校舎のある風景―地域の歴史遺産を考える]
https://www.city.nishiwaki.lg.jp/kankotokusan/rekishishisekimeisyowomeguru/bunkazai/24352.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関